
異世界(。´・・)エツ

CAT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界（。）（。）エッ

【Nコード】

N0305Z

【作者名】

CAT

【あらすじ】

異世界に迷い込んだ九十九^{つくも}めんどくさがりな彼は楽しい異世界ライフを満喫する為にチート能力と補正で様々な問題を解決していく物語まあはいつでも彼元々地球でもおかしい人間なただけだね

残酷描写ありってことにしてるけどどうなるか

やっぱり補正だな

俺は目を覚ますとそこは森の中だった・・・

「ごごごだぁー」

まあとりあえず叫んでみる

「・・・」

うん、だれもいないか昨日俺は自宅のベッドで寝ていたはずなんだけどな

「まあ、いいか」

あれか・・・あれなのか・・・

まずはじめに俺は右手の拳を握り締めちよつと力を込めて近くの木を殴ってみた

ドゴーーン

殴った木は木っ端微塵に

次は飛んでみるかなと

俺はかるーくジャンプしてみると

うんうん

約10メートルぐらい飛んでいた

あ・・・これ着地痛いかも

ド m9（*´、*） ン！！

ふう大丈夫みたいだな

やれやれやっぱ肉体が強化されとるな

俺はストレッチしながらとりあえず歩き出した

森を適当に歩く俺の前に悲鳴が・・・

聞こえてこなかった

人が通る道に出たのはいいけどだれもいないって

まあ異世界じゃそうなんだろうな

「おい、餓鬼金目の物だしな」

山賊さん3人が俺に声をかけてきた

「はぁ最初に出会ったのが山賊ってかわいい女の子にして欲しかったわ」

「なにいつて・・・」

めんどくさいので俺は山賊さんが何か言う前に動いた

ぐだぐだいらん言い合いしても結局殺すことになるんっだし無駄無駄

俺は山賊の一人が腰にさしている剣を奪うと彼らの首を切り落とした

え、人殺すのに躊躇しないかって

うん、言っただけでなかったな俺元傭兵だし地球でねv(´・`・´) キヤピィ

とりあえず彼らの体を探ることに

はあほんと貧乏だな、まあ金がないから山賊なんかしてたんだろうけど

三人合わせて銀貨3枚に銅貨24枚って価値わからんけどきつと少ないな

まあないよりましか、俺は彼ら剣二個を奪いまた歩き出そうとした

「死ね山賊」

いきなり鎧を着た騎士風の女に切りかけられた

まあ避けたけど、てか山賊の死体を漁って山賊に間違われるって

というかいきなり切りかかるなよな

「いきなり切りかかるなよ俺は山賊じゃねーし」

「貴様死体からなにか奪っていたではないか」

「襲われたから返り討ちにして金目の物もってないなかって探っただけだろ」

「それは冒険者がすることか」

「いや俺冒険者じゃないし」

「やはり山賊か」

「はあ（・・・）ウザ・・・」

めんどくさいからかーく気絶させてみた

うん いい感じで気絶

「き、貴様」

なんかすっごい睨んで何か言おうとしてたな

嫌いになり襲ってきた奴にそんな目で見られても

とりあえず道に彼女を置いていくのもなんだし誤解解く前に町まで言っただがーがー

言われるのもめんどくさいので彼女を担いで森に戻ることにした

女騎士

さてこれからどうしようかな

森に戻った俺は

女騎士さんの荷物から紐を取り出し木に縛ってみました（・・）
ニヤ

近くに川があつたので山賊を殺した返り血を洗い流して戻ってみると

女騎士さんが目を覚ましてこちらを睨んでいます

うんうん、そりゃ睨むよね

ああ口には布かませてるよ、だってなんかしゃべられたらうるさいし

7

「さて女騎士さん、俺は九十九今から君に聞きたいことあるから布
とるよ大声とか出さないでねべつになにかするってわけじゃないか
ら」

女騎士さんはなんか頷いてるので外してみる

「君の名前は」

「私はセリアだ、冒険者だ今に仲間が助けに来るぞ早くこの縄を解
け」

「えーとそこはまあ聞いてないけど、そうなると君を殺さないと

いけなくなるな」

「な。なんで貴様」

「君が死ねば問題ないだろ目撃者もいないんだし、てか君は俺の質問にだけ答えればいいんだよ」

剣を彼女の首元に当ててみた

「まあ殺す気はないんだけどね、俺は旅人で元傭兵で今は迷子で道に迷っていたところ山賊さん達に囲まれて仕方なく殺したんだよ」

まあ本当はめんどくさいから殺したんだけど

「それでこの近くに町ってあるの」

(〇 . . . 〇) ニコッ って感じで聞いてみたんだけど

彼女は睨みながらだまってしまった・・・

「んーしゃべってくれないと困るんだよね」

「・・・」

ガサガサ

音がしたので周りを見てみると

なんか知らない間に狼ばい生き物達に囲まれていた

「はあめんどくさいな」

「お前、ブラウンファングの群れだぞ早く私の縄を解け殺されるぞ」

彼女がなんか言ってるけど無視して俺は持っていた剣をかるーっく
水平に振り抜いてみた

やっばできたかてか剣が折れてる木ごと狼もどきを切ったからな

彼女は目が点になっている

「で、話の続きなんだけど近くに町ってあるのかな」

「いや、お前その前に今のはなんだ」

「質問してるの俺なんだけど・・・」

彼女はなんか睨みながらも答えてくれた

「北に3時間ぐらい歩けばベルーラの町に着くはずだ」

「そっかそっかようやく話が出来た、じゃあ次の質問君冒険者って
いうけど冒険者はだれでもなれるのかい」

「そんなことはだれでも知っているだろう」

「いや俺はべつの大陸から着たから冒険者っていうのわかんないんだよね」

たぶんギルドとか登録したらだれでもなれるんだろうけどーを聞いてみた

「そうか、冒険者ギルドで登録したらだれも冒険者になれる」

「そっかそっか、ありがとそれじゃ」

歩いて立ち去ろうとする俺を見て

「お前待て私をここにおいていくつもりか」

俺はしばらく考える振りをしてから

セリアの縄解く

「あ、でも襲ってきたら殺すからねv)・v)・(キャピィ」

彼女にそういうと俺は彼女を縛っていた紐を剣で切ってあげた

さて町まで行くかな

「まてまてお前私の武器と荷物を返せ」

「え、突然襲ってきた君がなにを言ってるの生きてるだけいいじゃ

ん

「そ、それは貴様が怪しかったからだろ今でも怪しいが」

俺はしかたなく彼女を連れてだってベルーラの町へ向かうことにした

セリアが仲間になった？

俺は女騎士ことセリアとふたりベルーラの町へ向かった

まあ彼女がうそついてる可能性もあるからこれでいいんだけどね

「・・・」

「・・・」

無言だ30分ぐらい歩いてるんだけどセリアは無言だ

「セリカってBランクなんだ結構強いんじゃない？」

「なぜ、貴様がそんなことを知っている」

「いや、君の荷物の中のギルドカード？に書かれてるから」

「私の荷物を返せ・・・」

「いやもう俺の出し・・・でも返してあげてもいいよ」

「本当か」

本当は返そうと思ってたんだけどなんだが生意気だったし

「ただし条件がある」

「条件だとそれは元々私の物だぞ」

「嫌ならべつにいいよ」

「わかったその条件というのをとりあえず聞いてやるう」

なんかさつきから偉そうなんだよな武器も持ってないくせに

俺が取り上げたんだけどね。・ p q) クスッ

「俺迷子だって言ったよね、だから町で教えてもらいたいんだよね」

「それは私に従者になれってことか」

「ん、いやしばらくの間、町で生活する事になると思うから教えて欲しいんだよね」

「それだけでいいのかというか私が町に着いたらお前を捕まえるとは思わないのか」

「ん、そんなことしたら君間違ひなく死ぬよ、それでもいいなら俺を捕まえようとしてもいいけど」

「・・・わかった条件を飲もう」

彼女が首を縦に振ったと同時に俺は彼女の剣と荷物を投げて渡してあげた

というか武器と荷物重くはないけど邪魔だったんだよね両手ふさがるし

「あ、ありがと武器までいいのか」

「邪魔だし俺まだ山賊から奪った武器もあるし一本だけだけど、それに力量ぐらいわかるだろ」

それにしてもあれから2時間近く歩いてもだれともすれ違わないな

山賊とか出たらめんどくさいけど、そんなことを考えながらベルーラの町が見えてきた

「あれがベルーラの町だ九十九」

「おう、まあ見ればわかるけどなセリアがいつてたし」

それにしてもセリアって可愛いよな髪の毛は真っ赤で瞳はくりっとした真っ赤

鼻もすーとしてて顔も整ってるしスタイルもいい胸は鎧で隠れちゃってるけど

さらしても巻いてるのかな)・・・)

「わ、わたしは胸もあるぞ」

「(・・・)ノえっ！声に出してた、っていつか否定するとこそこそこの」

なんか頬が赤くなってる気がするけどどうなんだこれ

異世界の女性はそういうものなのかなっと思いつながらブルーラの町へたどりついた

ギルドだよ

「ここが冒険者ギルドか」

俺は巨大な建物の前に立って呟いた

ベルーラの町についてギルドまで向かう途中いろんな人がセリアに声をかけていなあ

おばちゃんおじちゃん冒険者風のおっさんに兵士ばい奴までセリアって有名なんだなたぶん

「九十九早く行くぞ」

そういつて建物の中に入っていくセリア

建物の中に入るとそこはイメージしていた酒場ではなくどこぞの役所ぽかった

「セリアさんお帰りなさい今日は街道にでる賊の討伐に行っただと思っただんですか、もう終わったのですか」

と猫耳の受付がセリアに話しかけていた

「あ、そうだった私がついた発見した時に賊は死んでいたんだが証拠かあ」

セリアは頭を抱えて黙ってしまった

「おいセリアこれ証拠になるか」

俺は盗賊の死体から盗んだ財布の中に入っていたギルドカードばいのをセリアに手渡した

「おおカード持ちだったのか、それでかまわない」

そういうとセリアは俺からカードを受け取ると受付の猫耳に手渡した

「ちょっと調べますね」

猫耳はカードを受け取ると読み取り機？かなにかに当てて確認していた

「確認できました依頼達成ですセリアさんギルドカードをお貸しください」

「あ、ちがうエミリア賊を退治したのは私ではないそこにいる男だ」

「え・・・」

驚いた顔してる猫耳は俺の方を見てる

「失礼しました、それではえーとギルドカードをお貸ししてくださいますか」

「いやもってないけど」

「それでしたら身分証明カードを」

「いやもってないけど」

「……」

「……」

見つめあう俺と猫耳

猫耳さわりたいなふわふわしてるのかななんて考えていたら横からセリアが話し始めた

「エミリアすまんこの男別の大陸から来たらしいのでギルドカードはもってない、今作ってもらえないだろうか」

俺から視線をはずした猫耳は机の下から一枚の紙を取り出し俺に渡してきた

「あ、はいわかりました、それではこちらに記入をお願いします、名前年齢性別その他に技能などありましたら記入を」

俺は猫耳から紙を受け取るの（・エ・〇）書き始めようと思って気づく

言葉はなんかしらんけど通じるけど文字も読めるが俺こっちの字わからんぞ

俺はセリアの方を向くと

「セリアこっちの字読めるけど書けんぞ変わりに書いてくれ」

「そうか九十九は字が書けないのか」

なんか勝ち誇った顔で見られた気がした

「いやこつちの字が書けないだけだからな」

「うんうんわかってるわかってる私が書いてやるっ」

「なんか腹立つな」

そういつてセリアに代筆してもらった

俺が殺した賊は元冒険者だったが素行が悪く冒険者だけでは食っていけなくなり

賊に身を落とし街道で冒険者や商人を襲っていたらしい先日賞金首として依頼を出したところ

セリアが依頼を受けて今日早速向かったところ俺をその盗賊と勘違いしたってことらしい

登録用紙を渡して水晶に手を当てたら登録完成ギルドカードに賞金の銀貨30枚をもらえたので

俺は満足してセリアと別れてギルドからでたのだった

微妙にオーバーテクノロジーなところがあるんだよな

そうそうギルドのランクは最初はみんなEランクらしいのだが俺はCランクってことになっていた

どうやら賞金首の討伐とセリアが推薦したって形でそうならしい規約などめんどくさいことは聞いてないだつてめんどいし

冒険者ギルドからしばらくセリアから聞いた宿屋に向かつて歩いて
いると

案の定後ろから付けてくる奴らの影がまあギルドの中でこつちを睨
んでるあほな奴らがいたのに

気がついてセリアと別れて路地裏までおびき出したんだけどな

「で、お前ら俺になんかようか」

そついうと隠れていたあほ共が5人も出てくる

冒険者つていうかただのヤカラだよなあれ

普通に剣とか斧とかもつとるしぐ（　・　・　○）オイオイ新人いじめ
とかじゃないなこれ

一人の男が俺の方を見て

「兄貴を殺したのはお前か」

ああ、なるほど賞金首つて言っても元冒険者だもんな仲間がいて当
然か

「ああ、賞金首を殺したのは俺だがお前の兄貴だったのか」

めっさ睨んでる全然怖くないけど

「兄貴の仇取らして貰うぞ」

「はあ、なんで賞金首殺して敵討ちされなくちゃいけないんだよ、めんどくさいわ」

「やろう共行くぞ」

そういうとあほ共は武器を振りかぶってまっすぐ俺に襲ってきた

○(、・・・(○ウン!!あほだ

勝てるでも思ってるところがあほだこれならチート能力なくても殺せるわ

ちつとは考えて襲えよな

まあめんどくさいからいいけど

新人イビリぐらいだったらかるーく痛めつけて終わりにしてやったのに

敵討ちって言うからなこれは殺さないとだめだな

まあいいか、そういうと俺はあほ共の攻撃?をかるーくジャンプしてかわして

山賊から奪ったもとい賞金首くんから奪った剣を上から弟君に振り

まあどうにでもなるか俺はセリアから聞いた宿に向かうことにした

死体？放置ですよそりゃめんどくさいじゃん

カラスでも野犬でもこんな世界だいい餌になると思うよv(´・`)

´(´) キャピイ

異世界ヤダ(; ;)ヤダ

俺はこっちに来てはじめて泣いた

「九十九お前何泣いてるんだ」

「お前にはわからんのか風呂の偉大さが一日の疲れを癒す最高のひと時の時間がお前はあれか風呂はただ体を洗うものだと思ってるのか・・・」

そのあと俺はセリアに風呂の偉大さとどれだけ俺が風呂に入りたいかを説明しまくった

30分後

「風呂っていうのはな」

「店の前であんたらいつまでしゃべってるんだい」

突然声をかけられた俺とセリア振り向くとそこには

(○。・。・。○)ぷっくらなおばちゃん立っていた

「あんたセリアの知り合いらしいけどうちに泊まるんだらったらさっさと手続きしてくれないかね」

俺はしかたなく宿屋にはいつていた

おばちゃんは受付に着くなり

「一泊銅貨60枚ね朝飯は朝7時から9時までの朝食の料金は食べても食べなくても同じだからお変わりはパン2個までそれ以外は追加料金、部屋は二階の一番奥 夕食別料金だから今から食べるなら食堂で食べていきな、それとお風呂はないけどお湯と布ほしいなら言ってくれたら部屋までもってってあげるよ」

「ああわかった」

俺は財布から銀貨3枚渡すとお湯と布を部屋に持ってきてくれと頼んだ

おばちゃんは銀貨を受け取ると鍵を渡してくれた

「セリアちよつと部屋に着てくれるか聞きたいことがあるんだ」

「風呂の話か」………「」

「いやもういいよ別だ」

そついうと俺は2階の一番奥の部屋に向かった

部屋にはベットと小さなテーブルが一つ

ビジネスホテルか

銅貨60枚で一泊6000円ぐらいか

一食は銅貨5、6枚ぐらいだとかセリアが言ってたし

硬貨全部で五種類 白金貨 金貨 銀貨 銅貨 鉄貨でそれぞれ百枚で同等の価値になる

鉄貨はほとんど使われることはないらしい

っていつか早くお湯来ないかな風呂はもういいとして体は拭いて寝たいわ

コンコン

ドアを叩く音がした

「開いてるよ」

そついうとセリカがお湯の入った桶と布をもって部屋に入ってきた

セリアの事情？

セリアがお湯を持ってきてくれたので俺は服を脱ぎ体を拭き始めた

「お前、私がいるのに」

「え、問題ないだろ、それとも男の裸見るの初めてか」

「そういうわけじゃないがそれで話っていうのはなんなんだ」

「ああ、そうだったな」

「お前魔法って使えるのか」

「聞きたいことって言うのはそれが」

「ん、なんだお前を部屋に連れ込んで甘い言葉でもはいて襲うつもりだったのか」

「いやそういうわけじゃないが」

「じゃあさっさと答えてくれ」

セリアは少し考え込んでから話し始めた

「すまん、私は魔法が使えないんだ」

「魔法つてだれでも使えるんじゃないのか」

「それは・・・」

なんかしらんがセリアは俯き黙りこんでしまった

「なんかようわからんけどセリアに聞いても無理ってことだな、わかった明日にでもギルドで聞いてみるかな」

「九十九・・・」

「ん、どうかしたのか」

「私は魔法が使えない体質なんだ」

「そ、そうなのか」

「ああ、この世界では魔法はだれでも使えるんだ、私は元貴族なんだ」

「で、それが問題なのか」

「魔法を使えないっていうのは平民でも差別されることなんだ、それが貴族、人々の代表とも言われる貴族では・・・表に出せないそれが原因で私は家族から捨てられたんだ」

「へーそれで冒険者になったってことが、めんどくさいことだな」

「・・・お前はなにも思わないのか」

運命の出会いだったらしい

sideセリア

私は今日不思議な男に出会った

いつものように冒険者ギルド適当な依頼を探していた

ランクC賞金首 報酬 銀貨30枚 古の狼へ続く街道に出没する

元冒険者部下2名

元冒険者その名前を見た瞬間怒りがこみ上げてきた

数ヶ月前その冒険者と共に仲間数名と共同で商人の護衛の依頼を受けたことがあった

しかし依頼は失敗

王都へ向かう道中、突如魔物の群れに襲われた数は50数匹

私と仲間の冒険者は声を掛け合い魔物と戦おうとしたその時

奴らとその仲間はこともあろうに商人をおいて逃げ出したのだ

私と仲間他の冒険者達在必死で戦いどうにか私と仲間は逃げることに成功したが

馬車の荷物は荒られ商人の部下と冒険者数名が命を落とした

その後冒険者ギルドでそのことを報告するが奴は別の町へ行っ
て行方知れず

私はその男を殺せることに感謝をしながらその依頼を受けた

古の狼へ続く道を3時間ほど歩いているとなにやら死体を漁っ
ている男を見つけ奴だと思

切りかかったがあっさりかわされてしまう

「いきなり切りかかるなよ俺は山賊じゃねーし」

「貴様死体からなにか奪っていたではないか」

「襲われたから返り討ちにして金目の物もってないなかって探っ
ただけだろ」

「それは冒険者がすることか」

「いや俺冒険者じゃないし」

「やはり山賊か」

「はあ（´・`・´）ウザ（´・`・´）」

私は武器を持ち替え奴が動くのを見ようとしたが

すでに奴はいない私は後頭部に強い衝撃を受けた

「き、貴様」

目を覚ますと私は男に紐で縛られていた

奴の名前は九十九

ほかの大陸から来た傭兵らしい

私は当初なにも話す気はなかった奴が盗賊である奴らの仲間である可能性もあったからだ

しかしどうやら違うらしい私は血が上っていて奴を勘違いしていたらしい

そのあと九十九の不思議な魅力に私は取り付かれしまう

用意周到のようでもなにも考えていないような行動

そして風呂にこだわる九十九あれはこまった30分近く話を聞かされたのだ

宿屋のおかみさんが止めてくれなかったらいつまで続いたことか

夜夕飯も食べずに寝てしまった九十九

その前に九十九の部屋で聞かされた異世界人という言葉

勝手に納得してしまった

私が元貴族といっても魔法を使えないといっても本当にどうでもいいことのように

私は彼に引かれているのか、まだわからない

しかしこれから私は彼の傍にいることになるだろうと予感がする

この出会いは運命なのかもしれない九十九は何かをしてくれる予感がするのだ

私は半年契約で借りている宿屋の自分の部屋のベッドで横になっている

九十九顔は洪くて怖い身長は私より高く180ぐらいあるだろうが

引き締まった肉体

今は亡き私の最愛の兄、家族の中でやさしくしてくれた兄そんなことを思いながら私は眠りに付いた

「ぐーぐーぐがああああああああ

まあ、なんだ

「あ、知らない天井だ・・・

えた」

よし言

「なにを言っている」

なぜかセリアが扉の前に立ってこちらを見ていた

「いや、この台詞言いたかったんだよ」

「なにかしらないが早くしないと朝食の時間過ぎるぞ」

「え、もうそんな時間が昨日結構早く寝た気がするんだがっていうか時計ってあるのか」

俺の格好はジーパンとパーカー時計なんて持ってないっていうか

そっというとセリアは胸から懐中時計を取り出して見せてくれた

「宿屋の受付にも時計置いてあったのみてなかったのか」

「いや昨日は眠かったし」

俺は眠い目をこすりながらセリアと食堂へ向かうことにした

食堂でパンとスープを食べた俺とセリアは冒険者ギルドへ向かった

「セリアが魔法使えないとなるとどうするかな」

「そんなに魔法使いたいのか、九十九は今でも十分強いと思うのだが」

「まあこれは夢というかロマンだな」

「そういうものなのか、それでどうするんだ」

「とりあえず女将さんがいってたけど依頼でもしてみようかな」

冒険者ギルドについた俺とセリアが受付の猫耳っこに魔法を教えて欲しいと言う依頼を頼んだ

ランクD 内容 魔法の基礎知識を教えてください 報酬 銀貨10枚
「エミリアどれぐらい掛かるかわかるか」

「この条件なら午前中には見つかると思うから午後また着てくれたらいいわ」

「わかった、九十九武器やでも見に行くか」

「そうだな、そうするかな」

俺はセリアの提案で武器屋を見に行くことにした

呪いの武器って定番かw

武器屋にやってきた俺とセリアは気の良さそうなちっこいおっさん店主

まあドワーフだな髭すげえってなことを考えながら、かるーく挨拶を交わした後

店の中にある武器を見始めた

短剣に片手剣両手剣、斧に鈍器、弓矢に槍それが無造作に壁に立てかけられている

俺は端から順番に遣さそうな武器の感触を楽しんでいるとセリアに声をかけられた

「九十九こつちだ」

「（*´・`・）ン？どうした」

「そこらへんに置いてある武器は大量生産で作った武器を置いてあるだけだ裏に本物がある」

「本物ねえまあいいけど」

俺はセリアに言われるまま歩いていくとそこには先ほどとは明らかに違う武器が綺麗に並んでいた

「。+。(ノ、・・)ノオオオオ。+。すごいなこれ」

「どうだわしが選んだ傑作は」

「これあんたが作ったのか？」

「わしが目で見つけた物じゃ、お前さん腕が立つようじゃないかこの武器の中から武器を一つ選んでみな」

「わかった」

どれがいいかな、お、これ日本刀じゃね洋刀もいいけどやっぱり日本刀かな

んーどうもしっくりこないな

こっちの槍もいいなもって歩くのめんどくさいな

。+。(ノ、・・)ノオオオオ。+。なんだこの紫色ばい瘡気？
漂う長剣

これ良さそうだな

○、・・() ○ ウン！ー！いいこれいい

「汝 我を 持つに 相応しいか 者か」

「だれ？」

「我は 長剣 成り 力 在る者を 求める」

「武器がしゃべるのか、うん面白い、お前俺が使つてやる」

「我を 持つに 相応しい 者で在るか 貯めさせて貰おう」

そう長剣が言った瞬間俺は強烈な痛みを全身に浴びたので頭にきたので長剣を押し折つてやった

「な な 我を」

「五月蠅いぞ剣 俺がお前を選ぶんであつてお前が俺を選ぼうとしてんじゃねえよ」

「また同じことしやがったら粉々にするぞ」

「我を」

「返事は・・・」

「わかった」

ドワーフのおっさんがすこし腰を抜かして倒れているのが見える

セリアは呆れてる？

「なあおっさんこれちよつと整えて双剣にできないか」

「ああああ、べつに問題ないが まさか呪剣を選ぶとなセリアが認めた男だけのことはある」

そういつとドワーフのおっさんは俺から折れた長剣を受け取るとどこかへ行ってしまった

「なあセリアこれからどうする武器はあれでいいとして出来るまで暇だしまだお昼まで時間あるだろ」

「そうだな九十九は防具とか必要か」

「んーべつに必要ないな・・・丈夫なコートがあつたら欲しいけどな金もないしな、というか武器のお金足りるん（・・）カツ！？」

「それは問題ない私が払つとく」

「じゃあどうするかなちょっと早いが飯でも食べに行くか」

「そうだな」

そういつと俺とセリアは飯を食べに武器屋を出たのであった

「武器が話すのにも肝が冷えたが武器折って黙らせるとか長生きしてみるもんじゃの」

ドワーフのおっさんは武器を成型しながらつぶやいたのであった。

美少年って

町の中心部食堂が立ち並ぶ道を歩く俺とセリア

「でセリア俺店しらんわ、どっかおいしいところないか」

「それじゃあ私がいつも行く店行こう」

そういつて連れて行かれた俺だがなんだこのぼろぼろの喫茶店は

「・・・」

「どうした九十九早く入るぞ」

そういつて一人入っていくセリアじゃあないからついて行くけど

「マスターいるか」

「あーん（*、、*）」

ちょっと強面のおっさんが奥から出てきた

セリアの知り合いはおっさんばっかりか

「オムライス2人分頼む」

「あいよ」

そういうとマスターは厨房に引っ込んでいった

「九十九そんなところで立ってないで座ったらどうだ」

「ああ、そつだな、ここうまいのか？」

「うまいぞ店はぼろいけどな早いうまいそれに安いし、オムライス二人前で銅貨8だからな」

「そつか」

その後すぐおっさんがオムライス2皿もってきた

愛想はなかったがオムライスはうまかったので俺は料金を払ってお店を出た

そのあと町を適当に見て回り時間も時間なので冒険者ギルドへ行くことにしたのだった

冒険者ギルドにつくと猫耳がセリアに声をかけてきた

「依頼受けてくれる人見つかりましたよ、それもAクラスの魔法使いさんが、今ギルドの待合室で待ってもらっていますから呼んできますね」

「ありがとうエミリア」

そういつてエミリアは走って去っていた

「Aクラスか私より強い魔法使いがこんな依頼を・・・」

「まあ、ちょっと魔法教えるだけで銀貨10枚だしいいんじゃないのか、しっかりした奴じゃなかったら縛り付けて聞くだけだし問題ないだろ」

「九十九・・・お前」

「なんかおかしいなと言ったか？、俺を騙そうって奴は痛い目みしたらいいんだよ」

「もうなんかお前はすごいな」

数分後

エミリアが戻ってきた横にはローブを纏った青年を髪は金髪 顔立ち
は、、、

なにこの美少年あれかあれなのか異世界って言うのは美少年が登場
するのが当然なのか

「お待たせしましたセリアさんに九十九さん、こちらが依頼を受け
てくださった冒険者です」

「はじめまして、ライアスといいます若輩者ですが魔法学校で魔法
を学んでおりましたのである程度のことなら、お教えできると思
います」

そういつて頭を下げてきた美少年、〇、〇、〇、〇、〇、〇、
！好意印象

俺は彼の方を向き丁寧に挨拶をした？

「魔法についてなにも知らないので詳しく教えていただけたら幸
いです」

そういつて軽く頭を下げる俺

ちよっと)*、口、ノ)ノびっくりしてるセリアもよろしくお願
いしますというと俺とセリアとライアスはエミリアから聞いた町外
れに歩いて向かうのだった、

。(。・。・。(エツなんで丁寧かってだって相手が丁寧にしたらこ
っちも丁寧にするよ

俺は基本相手と同じ対応してるし、もし偉そうな魔法使いが着たら
ボコボコにするけど)・。(

ラミアス先生

町外れの空き地に着いた俺とセリアとラミアスが早速

ラミアスから話を聞くことにした

「それでは魔法というのは自分内にあるマナをまたは世界に存在するマナを用いて言霊または術式を用いて奇跡を起こすものです、お二人はマナを感じられますか」

「ようわからん」

「わたしはマナがないみたいで」

「そうですか、おかしいですねお二人共すでに魔法を使われているはずですが」

「。。。。エツまじでなにそれ」

「わ、私が魔法を？」

「おそらく無意識に使われていたのですね、魔法とは火、水、雷、風の属性などを生み出す物と勘違いされているようですが実際には属性などなくありとあらゆる魔法を誰もが使えます、正しまれに内部マナを放出できない方は魔法を使えないと勘違いするのです」

「ってことは火とか俺らは出せないのか」

「いえいえ訓練さえすればだれでもその差はありますが使えるよう

になります」

「それじゃあ私は」

「はい、魔法をうまく使えないだけです」

にっこりと笑う美少年・・・嫌味がないなんてすごいやつなんだ

「属性はないと申しましたが相性というものはあります、たとえば火が得意な方、水が得意な方、転送や回復が得意な方などそれぞれ人によつて得意な分野があるので、それとマナを放出できない方の多くは強化魔法が向いている方が多いようです」

「なるほど、それで早速んだけどライアス魔法使ってみてくれな
いか」

「構いませんがお二方は魔法を見たこともないのですか？」

「俺はないぞ」

「私があります」

なんかセリアかわいくなつてないか—ヨエ・・・

「そうですか、それでは火の初級魔法を（火の精霊よ私の問いに答え姿を現せファイア）」

そういつた瞬間彼の右手の手の平に小さな火の玉が姿を現した

「。+。（ノ、・・・）ノオオオオ。+。すげえ・・・さわったら

熱いのか」

そーと手を出す俺

「熱っ、っ、これ出来たらライターいらんやん」

「ライターがなにかわかりませんがさわったら熱いですよ本当に火ですから」

「教えてほしいんだけど、それいつまで燃えてるんだ燃えるようなものないよな」

「そうですね、薪とかと違いこれは私のマナを燃料に燃えているですよ」

「なるほど、それじゃ次水って出せるのか」

「それでは水ですね水の初級魔法を（水の精霊よ我の問いに答え姿を現せウォーター）」

そういつた瞬間また彼の右手の手の平に小さな水の玉が姿を現せた

「。+。（ノ、・・）ノオオオオ。+。すげえ・・・けど今度はどうやって水出してるんだ？」

「私も詳しくわかりませんが空気中にある水を集めると言われています」

「それにマナを使ってるってことか」

「はい最初に集めあとは維持ですかね」

「言霊つて雷とか風とかほかも一緒か」

「はい魔道書に初級中級上級魔法の言霊は書かれていますね、そのほかに術式を必要とする魔法もあります、だからといって上級の言霊を使うとマナを大量に持っていかれるのですぐに気絶下手をすれば死ぬこともあります」

「よーしやってみよーと」

そついうと俺は手を出して言霊？

「（水の精霊よ私の問いに答え姿を現せウォーター）」

その瞬間手の平に小さな水の玉が。。。。。。エッこれでかすぎね

そう俺は初級魔法を使ったはずなのだが直径一メートルはある巨大な水の塊が

「やばやばこれどうしたらいいんだ」

「どこかに投げつけてください」

俺は言われたとおり水の塊を適当に投げた

ド m9)*、*)ンー!!

巨大な水溜りが

「……」

「……」

固まるセリアとライアス

「なるほど、でライアスお前魔法消し去ってたけどあれどうやるんだ」

「九十九さん先にそれ習ってから使ってください」

「なんか、m(o)……(o)mごめん、使えるとは思わないジャンd(・。・)」

「いやそんなかわいくいわれても、それにしても九十九さんはさすがですね」

「(・。・)ン？そういえばラミアス」

「なんですか」

「お前俺のこと知ってるのか」

「はい、昨日路地裏で冒険者を切り殺したの見ていましたから」

「まじかだれかに見られてる気配なんてなかったんだけどな」

「それは私も位置をAクラスの冒険者ですから、といたいところですが本当は透視球で見ただけなんですよ」

「なんだその透視球って」

「魔道具といわれる物で透視球といわれる遠隔から特定の場所を見る魔道具なんですよ」

「ふーんそれで俺に興味もってこの依頼を受けたってことか」

「はい、師匠に言われていた通りです」

「師匠ねえまあいいや、それよりセリアいつまでそこで頑張ってるんだ」

そうセリアも同じようにさっきから水を出そうとしているんだがいつこう出来ないでいた

「セリアさん」

「はい」

「セリアさんはまずはじめにマナを放出する方法を教えますから」

「あ、はい」

「それでは九十九さん」

「ん、なんだ九十九さんは制御の方法を出来るまで魔法は禁止です」

「エエツ。*、*。おまじか」

「はい、あ、それから今日は依頼料もらいますが明日から依頼料いりませんから」

「っていつかなんでラミアスお前仲間になろうとしてるん？」

「師匠に言われていましたから、数年後この地に英雄の資質のあるものが現れる、お前はそのものと共に進めと」

「まあ、いいか魔法ただで教えてくれるらしいしな、セリアお前もいいだろ」

「あ、ああっというか私はすでにお前の仲間だったのか」

「嫌か嫌ならべつにいいぞ、今日からラミアスにわからんこと聞けばいいしセリアよりわかりやすいし」

「な、それは困る、私の方が先に九十九を見つけたんだから九十九は私の物だ」

「いやあ俺ものじゃねーしなんかおかしなこといいはじめてるし、まあいいけど」

その後俺とセリアはラミアスから魔法についていろいろ教えてもらった

人物紹介なのか

あれから俺とセリアは一緒に宿屋に戻り食事をした

今は宿屋の自分の部屋で魔法の制御 桶の水を浮かせる練習をしている

これが一番いらしいとライアスに言われたセリアはセリアでなんか魔道具？に魔法と注ぐ

練習をしてた

ライアスは自分の家に帰っていったが明日の朝ギルドで待ち合わせしている

60

さて暇なので俺が出会った人の事でも話そうか

まあ最初に俺こと九十九

異世界人 地球にいた時は一人暮らしのフリーターのおんちゃんだ
年は28歳

結婚はしてないが彼女はいたが最近微妙だったので問題ない

日本にいる時は引き籠もり金は昔の貯金を切り崩して生活してた

傭兵だつて話したはずだが実際はちよつと違う訓練なんて受け取らん
軍隊にもおらんぞそれでなぜ傭兵？答えは簡単、俺は旅行が好きで
世界中旅を旅して周りつて

思つてつて旅行好きが引き子守つてまあいろいろあんなん、それは
置いといて

中東の某国まあ国は言わんけど行つた時運悪くテロ組織の兵士にな
つちやつた（＊、艸、）クスクス

まあ親切にしてくれてた人がテロ組織の結構偉い人で流れて運び屋
ばいことしてたら

あれよあれよといろいろ仕込まれて傭兵にまあその親切にしてくれ
た人たちもいつの間にか

捕まつたり殺されたりしていろいろあつて日本に戻つてのんびり過
ごしてたら異世界に来ちゃつたつて

感じだ〇（、・・・）〇ウン！！わかりづらい、まあええねん

俺のことはこれで終わり次はセリアのことかな

年は22歳、若い見た目十代かと思つてたよ

身長高い体重はしらんけど筋肉は結構ありそうでもデブではない

元貴族なんだつてどちらかといえば騎士つて感じなんだけどな

年は21歳やつは魔法使いだ以上・・・

終わりかってそりゃ男の紹介なんて適当でええやろ

明日の予定 武器やおっさんから武器を受け取り

俺セリア、ライアス三人で適当な依頼を受けることになってる

それじゃ魔法の練習も飽きたし寝るかな

そうそう昨日12時間以上寝たのは魔法を使いすぎたせいらしい肉体的に疲れてなくても

魔法を使うと睡眠が必要になるそうだライアスがいつてたからたぶんそうなんだろ

っていつか俺どれくらい強い(*´・`・*)ン?

セリア曰く私の2倍は強いそうだ ライアス曰く魔法を覚えたらSクラスも夢じゃないらしい

っていうことは現状補正があるとしてもA+ランクぐらいかな

さて寝ます、(人・`・*)。*。 おやすみなさい。*。

エミリアの猫耳さわりたい

翌日俺は予定通り武器屋のおっさんのところに双剣を取りに向かった
店に入る俺とセリア

セリアはもうなんか常に一緒にいるな、まあ別に構わんけど

「こんちわ、おやつさん双剣出来てる？」

「おお、昨日のあんちゃんかい、出来てるぞ」

そういうと棚に置いてあった布袋から紫色の二振りの短剣を俺の前に置いた

「これかぁ結構かつこいいな」

俺はその短剣を両手に持つとかるーく振り回した

「おいあんちゃん店の中でそう武器を振り回されても困るんだが」

「あ、、すみません）*・（）*——（）ペコリン」

そのあと俺はおやつさんから黒い皮のベルトと黒いグローブを貰ってお店を出た

セリアがおっさんとなんか話をしていたがまあどうでもいいか

ギルドについた俺とセリア

「九十九さんにセリアさんおはようございます」

ライアスはギルドに先について待っていた

「おはよう、それじゃ早速依頼でも探すか」

「そうですね、どのような依頼にしますか」

「討伐がいいかな護衛とかめんどいし守りたくないような奴ならいらつときて俺が殺しちゃうかもわからん」

「彼方なら本当にやりそうで怖いです」

「まあ簡単すぎてつまらん依頼もやなんだけどな」

「それは困りましたね、Bランク以上で3人の依頼となるの月に1つか2つあればいい方ですからね」

「そういうものなのかセリア」

「そうだなチーム組むわけだしあればいいけどな」

そんなことを話しながら俺は依頼が張り出されている掲示板を見た

ランクB トロル・ギガントなど殲滅鉦山の安全確保 報酬金貨5
枚 チーム推奨 場所キレイア鉦山

ランクB 王都までの護衛 報酬銀貨20枚 10名 残り4名

「（＊・・・）ン？これ両方ランク一緒だけど報酬だいぶ違くないか」

「それはチームと個人の差だなチーム推奨の方は報酬多いけど基本チームを組んでいないと受けれない」

「ふーん俺らってチーム組んでるってなるのか」

「問題ないぞギルドとしては安全を考慮して複数の人間で任務を行って貰う為にチームを組んでもらう、冒険者側もチーム結成して気の会った仲間とチームを組むものも多いからな」

「チーム申請するとなんか変わるのか」

「別に得点ってほどのことはないが複数のチームに所属してるものもいるからな」

「それじゃあこのトロールとギガントって奴やるか、ライアスもこれでいいか」

「ええ、問題ないです」

「私も問題ないわ」

依頼書をはがすして受付のエミリアに渡す

「これ受けたいんだけど」

「これですかたしか九十九さんはCランクですよ、それにこの依頼はチーム推奨なので個人では受けられないのですが」

「じゃあ先にチーム申請よろしく」

「俺とセリアとライアスの三人でよろしく」

「かしこまりました、それではこちらの紙に代表者の氏名とランクメンバーの氏名とサインをお願いします」

エミリアの猫耳かわいいなっていうかさわりたいなあってなことを考えながら

「これでいいか」

「ちょっと待ってください・・・はい結構ですそれでこちらの依頼の方なのですが」

「なんか問題でもあるのか」

「ッノ　　（イエイエ！こちらはギルド職員が付き添う事が必須となりますので私も行くこととなりますがよろしいですか」

「そうなのか」

「はい、私位置をギルドランクはCで回復魔法と槍を使えますので

足手まといにはならないかと」

俺はちょっと疑いの目を（「（ジロリ！

セリアが後ろから声をかける

「九十九エミリアは結構強いぞ私も一緒に依頼をする事もあるからな」

「依頼ってギルド職員が受けてもいいのか」

そういつてエミリアを見ると

「はい、依頼には期間が書いてありますが冒険者が請け負わない依頼などは戦闘が出来るギルド職員が臨時で請け負うことになっています、この依頼は2週間経っていますし現状がどういいう状況かわかりませんし不測の事態も考えられる為特別にギルド職員が付き添うことになっております」

「なるほど、よろしく（ノ。〈〉」

「はい、それですぐ向かわれるのですか？」

猫耳いいなエミリアちゃんかわいいしウ
ン（・・・・・）

「私も準備がありますので一時頃東門で待ち合わせという事ですよしいですか？」

一緒にチーム組んだら、その猫耳さわらせてくれるかなウ（・

・ ・ ・ (;)
ン

「セリアにライアスそれでいいか」

「ああ、エミリアと久々に一緒に冒険か楽しみだな」

「エミリアさんとチームですか仲間が増えるのはいいですね」

「それでは皆さんあとで」

そういうとエミリアは奥の階段を駆け上がっていったミ(ノ

ー(ノ=3ドテッ!

こけてる(; ・ ・ ・ (;) 本当に大丈夫なのかちょっと不安だ

それから俺たちは旅の準備の為買出しに行くことにしてギルドを後にした・・・

「あの・・・なぜ私なのでしょうか」

「それはお前が・・・」

「だからだ」

「はぁわかりました」

イベント起こらんとかないわw

東の城門で待つ俺・・・

暇だ早く来すぎたかな、今俺は一人ここで待っている

まだかなあの後セリアはちょっと寄る所があるとかいってどっかい
つたし

ライアスは師匠の家に寄って持ってきた物があるとかいってどっ
かいつたし

ああ暇だな、先いつてようかな

「お待たせしました」

下を向いていた俺は突然声をかけられた方を向くとそこには

めっさ長い槍を持つてる茶色い猫耳つこがエリアスか可愛いな・・・

「あの・・・そんな見つめられても困るんですが」

「え、食べるんですか」

ちよっと後ずさるエミリア

「いやいや、本当に食べたいって意味じゃないぞ、それぐらい可愛いと」

そついうと今度は少し頬が赤くなるエミリア、めっさ可愛い

「ありがとうございます、それでセリア姉さんとライアスさんは？」

「ああ、あいつらはまだ見たいだな、まああいつらが来ないからエミリアと二人つきりになれたんだしいいことだいいことだ」

「え、」

その後エミリアと楽しくおしゃべりしているとセリアがこちらにやってくる

赤い髪に整った顔立ち騎士を思わせる鎧に巨大な剣、剣でか2メートルぐらいあるんじゃないかね

「おお、遅れてすまん、武器屋のおやじに修理を頼んでいた私特製の大剣を貰っていてな」

「いえ、さつき着たばかりなのでそれにしてもいつみてもすごいです、その大剣は」

「エミリアのその長槍もすごいけどな」

それにしてもこっちの人間は化け物かあんな武器軽々もてるんだから俺でも補正なかつたら無理だぞ

その後セリアを加えて三人で世間話をしながら待っていると最後の奴がようやくやってきた

小走りに走ってやってくる魔法衣に身を包んだ美少年どこぞの杖？古びた杖に結構な荷物

「はあはあ遅れて申し訳ない、師匠がなんかノリノリでいろいろと荷物持たせてくれたのはいいのですがそれがあまりにも多くてすいません」

「まあ、別に構わんど、俺急いでないしエミリアの猫耳さわれたし問題ないぞ」

「な、九十九私はそんな話聞いてないぞ」

ちよっとびっくりしているセリア

「いや、べつに隠していたってわけじゃないけど」

「九十九はエミリア見たいなのがタイプだったのか」

「んータイプとはちよっと違うんだよな趣味だな猫耳って可愛いじゃない」

なんか頬を赤く染めてだまっているエミリアとちょっと涙目なセリア？

「セリアはセリアで可愛いけどな」

「九十九さんそれもどうかと」

「（*・・・）ン？なんかおかしいなと言ったか」

「いえ、それじゃあ行きましようか」

そういうラミアスでっかい荷物と杖をもって門をくぐって行く

「おう」

俺もその後を歩いて行くのであった

セリアとエミリアも慌てて追いかけてくる

「なあラミアス」

「はいなんですか」

「キレイア鉱山までどれくらいかかるんだ」

「徒歩で3日ぐらいですかね」

「まじか」

「はい」

「ってことは野宿か」

「そうなりますね、九十九さん野宿はじめてですか」

「いやそんなことはないが準備なんてしてないぞ」

「まあそうだろうと思って荷物大目に持ってきたんで大丈夫です」

「。+。(ノ、・・)ノオオオオ。+。お前いい奴だな」

「そうですね、戦闘になったら私は後ろで魔法打ってるだけですからそれぐらい当たり前ですよ」

「うんうんいいやつだゲームとかラノベとかだと生意気な魔法使いが多いからな、攻撃力しかないくせに偉そうな魔法使いとか、張った押したくなるからな、まあ実際ゲームでそんなキャラ使ってた奴をオフ会で泣かしてやったけどな（*、艸、）クスクス」

「ところどころわかりませんが私を殴らないでくださいね」

「おお大丈夫大丈夫、仲間になったら多少のことじゃ怒らんぞ」

「そうですね、でもそういう魔法使い多いですよ国に仕える方は」

「まじか、そんなやついたら殴っちゃうかも」

「それにしてもセリアさんとエミリアさんは仲がいいですね」

前の方を歩いている女の子2人前衛が女の子2人ってどうよ、まあいいか

「そうだな、お前はどっちがタイプだ」

「え、私ですか私はおねいさんタイプがいいのでどちらもタイプでは」

「そうなんか、ラミアス君はシスコンと（・エ・〇）メモメモ」

「え、どうしてそうなんですか」

（＊・艸、）クスクスなど楽しく進んでいった

それにしても野生の魔物とか全然出てこないんだけど

山賊とかなんか出来てもよくな

数時間後日が沈み野宿をする場所も見つかり夕飯を囲んでいる俺達
4人

「そついえばトルとギガントってどんな魔物なん？」

「トルは3メートル緑色の皮膚に巨漢で巨大な棍棒を振り回し襲
つてきます、Bクラスモンスターに認定されていますギガントです
がこちらは5メートル青色の皮膚です武器は持たず素手で襲つてき
ます、こちらもBランクモンスターですがどちらも単独行動が多い
です」

右横に座っているエミリアが説明してくれた

「そつかそつか」

その後食事も終わり、ぐだぐだ会話をして親睦を深めていった

2時間ごと順番で見張りをすることにして俺は眠りについた

最初はライアス次はエミリア次はセリア最後は俺だ

イベントないなら作ればいい

次の日も俺たちはただひたすら歩いていた

「ああ暇だ」

「しかたありませんよ、旅なんてそんなものです」

「ああ、車ほしい」

「馬車は軍か貴族が大商人ぐらいしかもてないですよ結構高いんです」

「そうなのか、まあ俺が言ったのは馬車じゃないけど、こっちじゃそうだろうな」

しばらく歩いていると前方から馬車が3台こちらに向かって来る

先頭には従者ぽい奴と護衛の兵士ぽい奴らが数十人

様子を見てみると馬車の荷台には首輪を付けられた人が何人が乗せられている

俺はセリアに話しかける

「なんだあれ」

「奴隷商人だな」

「ふーんこつちじゃ奴隷って当たり前なのか？」

「・・・」

「まあいいやあの馬車奪うぞ」

「は、お前何言ってるんだ」

「俺は奴隷って制度が嫌いなんだよ、なんか文句あるか」

「いや奴隷はこの国では認められている商人を襲えば私達はお尋ね者だぞ」

「証拠残さなければいいだけだろ」

「まっってください」

「なんだエミリア」

「私はギルド職員です、道中何があったか報告する義務があります」

「ふーんじゃあ奴隷制度お前は正しいと思っているのか」

「それは奴隷とは犯罪者などを」

「そんなもん殺すか重労働させたらいいだろ、どうせ小さな村で税が払えないとかで奴隷に身を落とすとかあるんだろ」

「それはしかたないことで」

「はあそんなもんその領主がしっかり領地を運営してないだけだろうが、まあいいやお前らに言ってもしょうがない、ただ邪魔はするなよ」

そういつて俺が馬車目掛けて走り出そうとするとライアスが声をかける

「ちょっと待ってください」

「あーん」

「そんな睨まなくても私は彼方を見守るようにいわれているので彼方がすることに一々文句は言いませんが私も何か出来ることがあるのではないかと」

「そういうことが、じゃあラミアスお前は俺が取りこぼした人間の始末を頼んだ、それじゃあ行くぞ」

「ああ私もやるぞ」

そういつてセリアも俺の後をついてくる俺は馬車の前に出ると馬車の車輪をかるーく

かるーく蹴り壊した、急に止まる馬車から長身の女性が出てきた

「貴様何者だ」

「いやあ歩いてるの疲れたから馬車でも奪おうと思ってな」

「盗賊かなにか我らをだれだと思ってる大商人ドーラの馬車だとわかっての所業か」

「いやしらんけど、大商人とか自分で言ってるしあほだな」

「おい、お前達この者どもを殺せ」

そついうと護衛の兵士ばいやつらが俺目掛けて武器を振りかぶりながら走って近づいてくる

(火の精霊と土の精霊をちよつと力貸せヴォルケイノ)

と適当に溶岩魔法をぶつけてやると奴らはどろどろになって溶けていった

「ああやりすぎたか」

女商人は慌てて逃げようとするが

「だれが逃がすかばけ」

そついうと俺は奴のところまでジャンプしてかるーっく殴る

女を殴るなんていやいや女だろうと関係ないそついうこと言ってる奴に限って女性を差別してるんだよ

とどこの誰にいつてるねんって突っ込みはどうでもいいとして

「九十九さんやりすぎです」

「。。。エッどうかしたかラミアス

「あれ見てください」

ああなるほど溶岩魔法で地面が凹んでるこれはさすがにやりすぎたかエへへ（*、*、*、*）ゞ

「それで商人襲ったのはいいとしてこの奴隷達どうするつもりだ」

セリアが奴隷達が乗っている馬車を見ながら声をかけてきた

「ああ、どうするかな」

「考えてなかったのか」

「まあいいやとりあえず奴隷達でも出すかな」

そついうと俺は奴隷が乗っている馬車の鍵を壊した

「あの鍵ありますけど」

「。。。エッ鍵あったのもっと早く言ってくれよライアス」

馬車から出来てきた男8名と女5名

「セリア首輪って外せないのか」

「首輪には魔法が刻まれている無理だ」

「ラミアス解除とかできないのか」

「出来ないはずですが、無理に解除すると首輪もろとも吹き飛ばよう
になってるはずですよ」

ウ　　（　・　・　・　；　）　　ン

「ちょっとお前来て」

奴隷男一人をこっち手招きして呼ぶ俺

「お前なにやって奴隷になったんだ」

「　・　・　・　」

「はあしゃべれ早く」

「俺は友人を殺した」

「ふーん、殺人かそれはなんでだ」

「裏切られてた　・　・　」

「まあなんか事情があったんだな」

そついつて俺はその奴隷の首輪に手をやると

（拘束を解き放てキャンセル）

首輪は光り輝いて外される

「おお前どうやったんだ」

驚いているセリア

「（*・・・）ン？魔法だけど」

「そんな魔法見たことないぞ」

「いや今作つたし」

「魔法つて作れるのか」

「あのあとラミアスに魔道書借りただけど魔法つて創造出来るイメージさえあればなんでも出来るらしくて初級魔法とかは過去の魔法使いが簡単に言霊だっけそんなの作つたばかりだから出来るんじゃないかって思ってた」

呆れるセリアとなんか憧れてる目？で見つめているライアス

俺は次々に奴隷達の首輪を外して行ってやった

「それでこの奴隷達どうするつもりだ」

「どうしようかな」

奴隷達の方を見る俺、奴隷達も俺の方をめっさ見てる

「お前ら好きなようにしな、もう首輪はないんだから自分の里に帰りたいなら帰ってもいいしかえる場所ないなら自分で勝手に見つけ

る俺に付いて来たいなら別にかまわんけど奴隷はいらんからな」

そういうと元奴隷達は目をまるーくしてる、そんな状況でセリアが俺に何かいつてくる

「それはあまりにも乱暴すぎないか、これはお前がやったことだろ
う、それにこの中には本当に犯罪者がいるんだぞ」

「エエツ。*、*。俺は奴隷制度が嫌いなだけだしべつに
後の事はしらんよ」

「そんなことをしてこいつらがまたなにか犯罪を犯したらどうする
んだお前の責任だぞ」

「それこそ俺の責任ちゃうわこいつらが犯罪犯したらこいつらの責
任だぞ」

「お前がこいつらを逃がしたから起きたことだと思わないのか」

「それをいうならこいつらを奴隷にしたやつらの責任だ一般人も含
めてな、今まで奴隷を認証してきた奴らがどうなるうと俺の知った
ことじゃない」

言葉を失うセリア、まあ俺の考えがわからんなら離れていくだけだ
どうでもいい

そんなことを考えているとライアスが声をかけてくる

「それはいいとして九十九さん奴隷を解放したら私達のが商人を殺
したことがばれますよ」

「それなら問題ないっと思っぞ」

「なぜですか」

「元奴隷のいう事と冒険者のいう事どっちを信用する？まあお前達が裏切ったらそんな時はそんな時だ」

「私は問題ないとしてセリアさんは・・・まあ大丈夫でしょうでもギルド職員でもあるエミリアさんはさすがに」

先ほどからだまって俺たちの方を見ていたエミリアに声をかける

「エミリア」

「はい」

「お前も奴隷だろ？」

「なぜそのことを」

「やっぱりか、なんとなくそんな気がしたんだ」

「え、エミリアが？」

驚いているセリア

「はあお前わからなかったのか、街に獣人なんていなかっただろってことは獣人は人間と仲良くないってことだろどうせ人間至上主義とかなんかあるんだろ、そんな世界で獣人がギルドで働いているん

だなんかあるって思わないのか」「

俺は元奴隷達の方を向く

「さっさと決めろ」

どんだけチートなんだよ

元奴隷達で残ったのは男1人女2人それ以外は別の国に行くそうだが詳しく聞かなかったためんどいので

残った男の一人は最初に首輪を外してやった奴だ

名前はスズ 年は26 身長は180ぐらい奴隷だったにしては体格も細くなく最近奴隷になっただけらしい

元冒険者で友人を殺したのも依頼の途中仲間をみの殺しにした友人の行動がゆるせなくやっただけらしい

そんなもの黙ってたらいいのにどうやらギルドに馬鹿正直に報告

友人はどこかの貴族の子息だったらしく拘束奴隷として売られたそうだが

魔法は苦手だが剣には自信があるらしい

どうして俺に付いてくるか聞くと恩を返したいそうだが

どんだけ馬鹿なんだお前

残り2人の女性は姉妹で村が盗賊に襲われ両親を含め何人もが殺され姉妹は捕まり奴隷商に売られたらしい

2人とも村で生活していただけて生きる方法がわからんそうだからどうにかしてくれそうだからだそうだ

姉の名前はミーシャ 年は17 青色の髪に青色の瞳体系はスラックトして170ぐらいあるんじゃないね

可愛いと言うより綺麗 瞳が青色なので冷たさがあるが・・・まあ美人だ

妹の名前はマリー 年は15 姉と同じ青色の髪と瞳ただ少し薄い体型はもうあれだ胸が馬鹿みたいにでかい姉よりは身長は若干小さいがそれでも165ぐらいはあるだろう、こちらは可愛いまるっこい印象だ

馬車は一台元奴隷にくれて残りの一台に乗って依頼のクレイア鉱山に向かうことにした

スズが馬車を走らせてくれるのでこれからの事を馬車の中で話すことにする

「エミリア」

「はい」

「ギルドのマスターになに言われて俺と一緒に来ることになったんだ」

「それは・・・」

「言えないとか言わないのかどっちだ」

そういつとエミリアは胸を俺に向け見せた、そこには赤い刻印が

「そ、それは」

「なんだラミアスしってるのか」

「それは赤き鎖と言われる一種の純正奴隷です」

「純正奴隷？普通の奴隷と違うのか」

「生まれてすぐ付けられる奴隷の事です」

「なんだそれ」

「奴隷というのは主人が開放しない限り一生なんですけど奴隷同士でも子供は出来る」

「ああ、そういうことか」

「ええ、奴隷の子供は主人の所有であるため彼女も生まれてすぐ奴隷として印を付けられたのでしょう」

「はあああ腐ってるなこの世界、潰すかこの世界」

「ライアスこの印って首輪と一緒に外せるのか」

「おそらく無理かと体に刻み込む赤い鎖は一生外すことが無理なのです」

エミリアが泣きながら

「で、でも私は幸せです御主人様もお優しい方で私も普通に過ごさせてもらって、時々任務を仰せつかるだけで」

「はあやさしいだとそんな印付けて普通に過ごさして幸せだあ、どこまで洗脳されてるんだ」

「で、でも私は奴隷ですから」

「ラミアス」

「はい？」

「この印って体の一部になってる為に取り出せないって事でいいの
か」

「そうです」

「めんどくさいな」

俺はそういつとエミリアの胸元に手を当てて彼女の胸を切り裂いた

ぎゃあああああ叫ぶエミリア

俺はそんなことを気にもしないで魔法を唱えた

(呪われし鎖を解き放てチエーンキャンセル)

(傷を癒せヒール)

見る見るうちに傷がふさがり切り裂いた胸元は綺麗な形に戻って
く赤い印もなくなつて

「これで問題ないな」

「ええ、それにしてもさすがです九十九さん」

倒れ眠ってしまったているエミリア

「セリアエミリアを頼んだ」

俺は姉妹の方を見ると姉妹はすこし振るいえている

「ライアスこの2人になんか魔法を教えてやってくれ、俺はちよつ
と疲れたから寝る着いたら起こしてくれ今日は疲れた」

そついうと俺は馬車にあつた毛布をかぶつて寝ることにした。。

寝ている間に

sideライアス

「ライアスさん」

「はい、なんですか」

「九十九さんは眠ってしまいましたが大丈夫なのでしょうか」

「問題ありませんよ、魔法の使いすぎで眠りに就いただけでしょうから」

「それではお2人に魔法の基礎でも教えましょうかね」

「はい」「はい」

そのあと夕方まで私は彼女達姉妹に魔法を教えた

姉のミーシャさんは水魔法がどうやら使える、どうやら村でも生活魔法程度は使えていたらしい

妹のマリーは補助魔法の素質があるようだこれは鍛えたらそこそこ使えるようになるかもしれない

それにしても九十九さんはすばらしい

師匠が言っていた通り私の望みも叶いそうだ

透視球で見た彼は恐ろしく強く残忍であった

しかし彼が行なり語った言葉で私は彼の心理が少しだけわかった

彼は誰よりもやさしいそして厳しいのだ

人間という生き物は総じてか弱いだが恐ろしく醜い生き物だ

時に一般市民を犠牲者と勘違いしているものが多い

だが彼は一般市民も加害者と言いつつ放ったのだ

それは断じて間違つてはいない社会を作るのは一人の独裁者ではなくそこに住む市民だ

奴隷という制度を是非として生活していた者達がなぜ被害者といえる言えないと私も思つてはいた

だがそれは暴論ともいえる一般市民は一人では何も出来ないだからなにもしない

自分だけが奴隷にならなければそれでいい

そして多くの一般市民は王族や貴族など階級制度の中生きていく

自分達より下のものがあるという優越感を感覚で理解しているだから何も言わない

それはいいとして現状私が裏切ったら九十九さんはどうする気だったのだろう

信用されているのかわからない、私は彼が寝ている間出来る事をしよう

彼の為にそして私の望みの為に彼は必要なのだから

side エミリア

私は奴隷・・・生まれてすぐ今の旦那様を買われ生きてきた

それでも私は幸せな方だ何不十分なく生きてこれた、この印のせいで恋一つ出来ないけど

夢を見ることも同世代の友達のように・・・

自分が奴隷と気づいたのは10歳の時だったいつものよう公園で友達と遊んでいた私

胸にあった印を自慢していたでもそれは奴隷の印だった私はわからず綺麗なその模様を見せびらかしていた

友達の両親が向かえに来て声が聞こえたあの子と遊んではだめだと
奴隷なのだからと

私はそれまで父を呼んでいた人に尋ねた

そして私が奴隷なのだを知ったそれから私は家の中で過ごすことが
多くなっていた

今では父とは呼んでいない呼べないのだ私は奴隷そう知った瞬間私
の仲の何かが壊れた

それは私自身が奴隷を見てきて知っていたせいなのかもしれない

村で食べ物がないから売られる少年少女記憶の片隅にあった本当の
両親のことを思い出したせいかもしれない

そんな時ギルドマスターから命令を受けた彼を九十九を調べ問題が
あると判断した場合殺せと

私は彼と話しているとなぜだかわからないが心が自由になっていた

自分が奴隷だと忘れるぐらいに

奴隷商人の馬車を見た時私は少し震えていた、そのあとの彼の行動
は恐ろしくもかつこ良かった

奴隷商人と護衛を魔法で殺し奴隷の首輪を外し私の胸の呪いも外し
てくれた、

「エミリア」

「はい」

「お前も奴隷だろ？」

「なぜそのことを」

彼は私が奴隷だという事をなぜか知っていた

私は何も言えないでいた

「起きたエミリア」

いつもと変わらないセリアの声

「うん」

笑顔で返事をする私

「よかった、もうすぐキレイア鉱山近くの町に着くよ」

「九十九さんは」

「あいつは寝てるよ」

横目で馬車の隅を見ると毛布に包まり鼾をかいて寝ている九十九さんが

「私決めた」

「なにを」

「私九十九さんに着いて行く」

「ええ、私もそうするって決めてるから」

（ ） 艸、（ ） ^ ^（ ）

笑顔になる私とセリア

彼なら私を自由にしてくれる、そう思えるから・・・

キレイア鉦山

俺が起きたのは翌日のお昼だった

「はぁ眠いわ」

「起きましたか」

「・・・なんでラミアスやねん」

「え、」

「ここはセリアがエミリアまあミーシャかマリーでもいいけど可愛い子が起こしてくれるところだろ」

「なんかすいません、それよりもうお昼ですよ」

「お昼って一日中寝てたんか俺」

「魔法使いすぎなんですよ」

「そついうもんなのか」

「九十九さんは魔法量も多いですが回復するのに睡眠が必要ですからね」

「まあいいか、それどこどこだ」

「ドーアの町の宿屋です、セリアさんは依頼人の方にあつて話を聞

いてきてもらいましたからすぐにもキレイア鉱山に行けるか思いますが」

「そうか、それじゃあ飯食べてからトルギガント退治でもしてくるかな」

そういつて俺とライアスは宿屋の部屋から出たのであった。

食堂には仲間達が食事をしていたのでそのテーブルに向かう

「オ、ヨ。ノウ」

「遅いぞ九十九」「おはようございます」「おはようございます」

「おはようございます九十九さん」「おはようつくくん」

順番にセリー、エミリア、スズ、ミーシャ、マリ

「いやいや、つくくんってあだ名ついてるし」*、艸、クスクスまあいいけど」

店員に適当に飯を頼んでまっているとセリアが話し始めた

「どつやらキレイア鉱山にいるのはトルとギガントだけじゃないらしい結構な魔物が集まってるらしい」

「そうなのか」

「ああ、この村長の話によると依頼を出した数日後、村人に探らせたところ、鉱山の入り口に魔物たちが行儀よく入っていくのがわかったそうだ」

「まあ、いいか飯食べ終わったら行くかな」

「本当にここなのか」

「ああここで間違っていないぞ」

俺達は今キレイア鉱山入り口にいる門番のように立っているトロール
2体

その奥に石を運んでいるギガント達

「ギガントとかトロールって群れないんじゃないのか」

「私もそう聞いているが・・・」

「まあ、今更どうしようもないか俺は正面から魔法でトロールを殺すからセリアは右からエミリアは左からギガントの相手集めたところでライアスが魔法でド m9（*・*）ンー！！だ頼んだぞ」

「……おう了解だ」

「……はい」

「わかりました」

そういうと二人は左右にしのび足で歩いていく

いくかな、俺は魔法を唱えながらトロルの前に進んでいく

トロル君たちも俺に気づいたようで警戒してるが無視

っていうか緑色の怪物きもいわ、ゲームと違ってぶよぶよ感がうわああああ

(火の精霊と土の精霊をちょっと力貸せヴォルケイノ)

そういつて魔法をぶっぱなす

。+。(ノ、・)ノオオオオ。+。綺麗に焼け焦げたギガント達がこっちみてるよでかすぎだろ

巨大な音が鳴り響いたと同時に左右からセリアとエミリアが攻撃ギガント以外の狼もどきを攻撃してるよ

っていうかなんでギガントこっち来ようとしてるねん

(、・、・)ウザ・

「ライアスどうにかしろよ」

「お待たせしました」

そういうのでライアスを見ると両手を空に挙げて巨大な玉・・・なんだその塊は

光魔法の特級使うとか言ってたけどそれないだろ あれかあれなの
かいわないけど

ギガントが俺の方に迫ってくるがライアス君は平然と巨大な玉を投げつけた

ド m9) *、*)ン!!

まぶしい目が焼けるよ ..)、.、(

しばらくしてそこには塵一つない砂地が・・・

うんライアス君強いね君、気を取り直して

「さて鉱山の中に入ってみますか」

「そうですね」

「・・・」

セリア、エミリア君たちもすごかったよ、うんたぶんあんまり印象ないけど

鉱山の中を歩く俺ら どこそぞの鍾乳洞って感じだな

時々襲ってくる魔物はセリアの大剣とエミリアの長層で串刺しにしていくので問題なく進むと

そこにはまるーいまるーい巨大な瑠璃色の塊が・・・

中になんか入ってないか、動いてるし

「これなんだと思う?」

ライアスに聞いてみた

「なんででしょうね」

エミリアがなんか答えた

「こ、これはクイーンの卵です」

「クイーン?」

「はい、クイーンSクラスモンスターです、女王蜂のような姿形をした魔物で鉱を好みそこに巣を作るといわれています」

「まあ、それでここを奪ったってわけか」

「そうだと思います」

「それでこれどうする焼く?」

「はい孵化する前に処分する事がいいかともし生まれて飛び立たれたら厄介です」

「じゃあそうするかなってあれ今殻少し割れたよね」

「ええ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305z/>

異世界(。´・`・)エッ

2011年12月8日04時53分発行